幼児の経験を生かして

菊地正子

昨年の春、親から離れ不安そうな顔で呼ばれる自分の名前に返事をするのが精一杯のようだった幼児たちが、元気な明るい顔で蜂の巣をつついたような騒ぎをしているきょうこの頃です。この間の身体、精神両面の発達は、全く著しいもので、心理学の本などで学んで知ってはいても実際に自分の記録を見直して、一人ひとりの環境と経験が各自の健康、社会性、知性、情緒の成長に有機的な関係のあることに改めて驚かされます。

今、これを言語による表現活動をとりあげて考えてみましょう。

幼児のことばは、幼稚園に入る前、今までの自分の生活環境の中ですでに感情の表現、欲求、思考などを他人に伝え、他人に理解され、また他人のことばを聞き理解する為に「はなしことば」として活用出来ています。ところが新しい環境の幼稚園に入って、種々の異なった経験と環境の見知らぬ幼児と先生に会い、途端にうまく活用出来なくなってしまいます。例えば、「御不浄にいくこと」にしても、Rちゃんにとっては「ジャージャーをすること」であり、Oちゃんにしてみれば「チィーチャマをすること」であるので、今までの生活経験にはないことばであるわけです。しかしこれはまもなく、「ジャージャー」や「チィチャマ」が「御不浄」になり、だんだんに今までのことばの活用をとりもどし個々の間に「はなしことば」として働きを持ってきます。

ところが集団生活で大勢の仲間の前で自分の気持をはっきり伝えたり、情緒、思考、経験を表現することは、今まで自由に使われていた「はなしことば」のようにはいかなくなります。

入園当初のHちゃんの話は、「自転車にのったの」「本を読んだの」「デパートにいったの」と一つの文章にはなっているが非常に短い経験の表現にしかなりませんでした。

年少の前半は級全体がHちゃんと似たような言語表現で、遅々として伸び悩んでいる格好でしたが、環境になれるにしたがって、言語、思考の発達は身体発達にともなって、年少の後半から年長の前半に入ると、日々変化を感じさせるように伸び始めました。こうした時期にHちゃんの言語発表は次のように変化していきました。

「あのね、お母さんと松阪屋にいってね、食堂でね、お子様ランチ食べたの。旗が立

ってるのね。あれね。あのね、三階かな、エスカレーターでいってね、Tちゃんの洋服を買ったんだよ。」

こうして、短い文章からだんだんに長いまとまった話を、自分の経験を通して話せるようになりますが、まだ幼児の特徴としての自己中心性が強く押し出され、一番印象の深い食堂の事が最初に出てきており、話の筋道が通っていません。また、その時の幼児の心の動きが話し方によって十分に感じさせますが、こうして文字として現わすとわからないように、情緒がことばとして表現されていません。

春の連休を利用していなかへ行ってきたHちゃんは、級の皆にはずんだ声でこういう話をしました。

「あのね、いなかへいったのね。そうしたら家の前に小屋があったのね。山羊がいたのね。山羊の赤ちゃんが生まれてね。まだよちよちでよく歩けないのね。かわいいのね。」

また夏休みの近い日、Hちゃんの妹が入院した時の話です。

「T子が病院にいったからね、お母さんがついていったのね。子どもはいっちゃいけないのね。『おりこうね』ってね、賞めてくれたんだ。」

山羊の赤ちゃんをすぐそばではじめて見た経験はHちゃんに「かわいいね」と山羊に対する愛情を、また妹の入院の間の母親のいない不安と悲しみの経験は「寂しいけどがまんした」と共に情緒をことばに表現してくるようになっています。その上、山羊の場合は「よちよち」という形容を、後者の場合は自分以外の人のことばをも挿入してきています。そうして話の内容も前後せず、文章の構造も次第に秩序だってきました。

そこで今度は生活経験の発表を土台として幼児の創作にと発展させていきました。創作しやすいように身近な材料として「おーちゃんのいたずら」という題を示してみました。この一つの同じ題に対して環境、経験の異なった三人の幼児の創作は興味深く感じられました。

先のHちゃんは「幼稚園のお預りのこまを持って来てお辨当の時にくるくるまわして、お家へ帰ってお母さんが『ごはんよ』っていってもこまをまわして、くたびれていねむりしてたの」と話しました。

三人兄妹の末っ子Mちゃんの家は非常に忙しい商店であまり面倒をみられないらしく見受けられ、幼稚園では人の見ているところではすました良い子ですが、人のいないのを見すますと、何もしない弱い児をポカッと通りがかりにぶっていったりするのをよく見かけます。そのMちゃんはこういう話を作りました。

「おーちゃんは幼稚園であんまりいたずらしたから先生にビンタをとばされたんだって（「ビンタってなんだ」とまわりから声が起りました。）お花なんかだまって取ってお母さんに叱られて泣きながら寝ちゃった

って」

Kちゃんはひとりっ子でおおぜいのおとなに大切にされ豊かに思うままに育ちました。おとなばかりの環境なので日常の言語もおとなのようで級の中に「テレル」とか「やじ馬」などということばを流行させました。

そのRちゃんの創作です。「おーちゃんはいつも喧嘩ばかりしていたの。とっくみあいしてこうやって（と、隣りの子の首を持ってねじ倒そうとすると『プロレスじゃあないぞ』とやじられました。）首なげをしました。幼稚園で遊んでいて、帰る時なかなか帰らなくてお母さんが迎えにきてひっぱって帰らせて、家に帰って『昼寝をしなさい』って言われてもねなくて、木に棒をぶら下げて剣道でポカンポカンやっていたんでお母さんが連れて来てとうとう昼寝させられたんだって。あの日、『悪いことをしたなあ』と思って『もうしません』と悪いことをしなくなりました。」

以上の三つの創作の話を考えますと、文章の構造では、自分の生活経験の発表でみられた情緒、思考の表現力が筋を作ることにとられて少し崩れていますが、ことばのおもしろさが現れてきています。この創作ももちろん、生活経験や環境と全く別個なものでなく、おーちゃんやねずみや象に託した自分の種々の経験—自分の実際にやったこと、やってみたいこと、友だちのやっていたこと、聞いたことなど—をおり混ぜてまとめられたものです。

幼児の生活経験が、そのまま経験で終ってしまうのではなくて、それが幼児期における人間形成の基礎を作る上に大きな位置を占めている言語という一つの表現活動に生かす為に、その良き場を与えることによって、幼児の思考も、情緒も、社会性も、自分のことばで表現し、自分なりの一つのまとまりをつけていく間に経験が自分のものとなり活用され発展していきます。

（東京・芝幼稚園）

日頃感じたまま

吉江紀子

卒業してもう三年、今年三月、私にとってははじめての卒業生を送り出して、現在は、二年保育の級で、毎日を夢中で過ごしております。改めて考えてみますと、この小さな人たちとのつながりの中で、どんなに多くのことを教えられているか、ふだん